

たじま広域



私は香美町小代区という豊かな自然の中で育ちました。学校から帰ったらずく近くの川や山へ行き、薄暗くなるまで外で遊ぶのが日課でした。今でもヒグラシの鳴き声や響く小路を帰りながら見上げた、紅の雲がゆったりと流れる夕焼け空を鮮

子どもの感性を育てる



森の中を散策する子どもたち(香美町小代区内)

やかに思い出します。私が自然体験を提供する仕事に就いたのも、ふるさとが季節ごとに見せてくれる自然の素晴らしさや、子どもたちの原体験の楽しさを誰かに伝えたいという気持ちを持ち続けていたことが動機の一つです。

人の感性が育つには、生まれ育った「人」「環境」「そこでの出来事」

は「存じの通りですが、この原因をつくり出してゐるのは、安全とか責任とかの言葉に隠れた「大人の事情」ではないでしょうか。

私が年間1500人ほどの子ども対象の主催事業を通して、子どもと接しながら感じるのは、昔も今も子ども本来の力は変わらないということ。

この子どもの持つ「生きる力」を伸ばすには、接する大人こそが今変わることが必要だと考えます。

などいろんなことが重なり合うことが必要と考えられます。特に子どものときに育ててほしい自然に対する感性は、幼少期の自然体験の中で培われていきます。乾いた草の匂い、土の感触、動物や夜の気配、生命が生きていると輝いている自然の姿を実感し、発見し、感動すること、人間本来の感情と感性が豊かに育っていくのです。

しかし現在、子どもが自主性を持って遊び回る環境が減りつつあること

などいろいろありますが、自然体験を提供する仕事に就いたのも、ふるさとが季節ごとに見せてくれる自然の素晴らしさや、子どもたちの原体験の楽しさを誰かに伝えたいという気持ちを持ち続けていたことが動機の一つです。

子育てに関わる大人が自分の枠内で考えて教えるようにするのはなく、自然の中での体験を通して一緒に感じ、自らも楽しむ機会をつくり出すことが重要です。美方高原で5月から始める「森のようちえん」事業もその一つ。肩肘張らず一緒に自然体験を分かち合いましょう。感性の養育は大人と子どもとの同時スタートでも十分間に合います。(尼崎市立美方高原自然の家所長 田中蒼人)